（A5判　三二八頁　二〇一四年三月
思文閣出版　税別六五〇〇円）

（佐藤稔介　京都大学大学院
人間・環境学研究科博士後期課程）

上杉和央著
『地図から読む江戸時代』

江戸時代に限るとはいえ、日本図の流れを新書で読めるのは、おそらく、織田武雄先生が講談社現代新書で『地図の歴史　日本篇』（一九七一年）を出して以来のことであろう。

ただ、本書は単なる日本図の流れではない。「江戸時代に作られた日本図やその作製に携わった人々に焦点を当て、時期ごとにどのような日本図が流布していたのか、そしてそこからどのような日本像が読み取れるのか」（二一七頁）を主眼に置き、伝統からの脱却、一七世紀前半の日本像、江戸時代中期の日本図、地図を正す、新たな日本像の展開、の五章でそれが展開される。

従来、江戸時代の日本図を語るには、幕府撰日本図と伊能図、前代の地図作製者である行基（行基が日本図を製作したかどうかの議論はさておき）、江戸時代中期における石川流宣、そして後期の長久保赤水を軸にして論じられることが多かった。それに加えて上杉氏は、自身の研究成果（『江戸知識人と地図』京都大学学術出版会、二〇一〇年）に基づき、森幸安と小津栄貞（本居宣長）を加えて論じる（第四章）ほか、地図を介した当時の知識人のネットワークについてもふれる。確かに、森と本居からは、日本図製作に対する思想的な背景を看取することは可能である。しかし、彼らの製作した日本図は手描き図であり、巷間に出回ることはなかった。その意味では、「流布」とは言い難く、世間一般が認識していた日本図（像）ではない。ただ、日本図作製に携わった人物を広く紹介することは、意義を認めてよいだろう。

また、地図製作といえば、カルトグラファーにとどまらず、板元について論じるのは不可欠である。この点について、流宣日本図（『本朝図鑑綱目』）の板元相模屋太兵衛、赤水日本図（『改正日本輿地路程全図』）の板元浅野（藤屋）弥兵衛を取り上げ、日本図に限らず、世界図を視野に入れて、販売戦略を論じている。この論によって、当時の日本図も含めた地図の流れが、より理解を図れるのである。浅野と赤水の繋がりについては、以前から指摘されるところである。しかし、浅野は赤水日本図の他に、『大日本国指掌図』や異なる日本図の板木株を取得している（『文化九年板木総目録』）。このことを言及する必要はなかったであろうか。

些か論旨が飛躍しているように思える点も散見されるが、紙数の都合上、日本図に関わって、気になった点を数カ所あげておくことにしたい。

一つは、「流宣日本図が刊行された後、北以外を上とした構図を持つ日本図は現れなくなった。（略）流宣日本図のイメージが社会に定着した結果、日本図の北は上という暗黙の理解が広まったのである。これは、意外に注目されていない事実であるが、日本像の展開としてきわめて重要な変化」（一三〇頁）とするが、それはどうであろう。例えば、本書所収の林子平の『三国通覧輿地路程全図』は刊記からすれば東が上であり、翠堂彭の『日本輿地全図』（嘉永

七年）そして勝義邦の識語を持つ『大日本国沿海略図』（慶応三年）は南を上とする日本図である。

もう一つは、伊能図が「書物奉行によって厳重に管理され」「伊能図は社会に流布してはならず」と、秘匿についてふれるが（二〇九頁）、萩藩全域を描く毛利家旧蔵の大図七枚（山口県立文書館蔵）のほか、本書で取り上げる徳島蜂須賀家旧蔵中図（図5―9）など、大名家に写本類が遺されている例は少なくない。となると、為政者をはじめとする人々の目にふれていたことになる。さらに、シーボルトの『日本』に「日本人作成による原図および天文観測に基づく日本国地図」として付されていることも考慮すべきであろう。

さらにもう一点。行基図の形態から脱却した『扶桑国之図』（図3―2）についてである。『扶桑国之図』は、寛文二年（一六六二）に京都の伏見屋が刊行した図がその最初とされてきた（拙著『日本古地図コレクション』でもそれを採用した）が、それに先立つ『扶桑国之図』が確認されている。「明暦三歳丁酉二月吉辰」の年記を有し、「板本江戸日本橋　中野太郎右衛門判行」とする図である。この図の存在については、以前に上杉氏に語ったことを記憶しているのだが、こちらの思い過ごしであろうか。拙著を訂正できていない責も痛感しているので、ここに記しておきたい。

（新書判　二四〇頁　二〇一五年九月
筑摩書房（ちくま新書）　税別九四〇円）
（小野田一幸　神戸市立博物館・学芸員）

受贈誌

（二〇一五年一一月一八日～
二〇一五年一一月二五日）

歴史（東北史学会）一二五
史創（史創研究会）六
経済研究（一橋大学経済研究所）六六―四
信濃（信濃史学会）六七―一一
日本歴史（日本歴史学会）八一一
日本史研究（日本史研究会）六三九
立命館産業社会論集（立命館産業社会学会）五一―二

編集後記

史林九九巻二号をお送りします。今号は論説・ノート・書評・紹介と多彩な内容となりました。御味読下さい。

史料の真贋区別は、史料批判の中でも基本中の基本です。しかし、最近では贋作も非常に精巧になってきているようで、わたくしが取り扱っている中国古代の木簡・竹簡の贋作の中には、放射性炭素年代測定をクリアしてしまうものすらあるそうです。所詮はいたちごっこなのかもしれませんが、そうした贋作を排除するための方法論、さらには贋作そのものが生み出されないようにするためのモラルの確立がまたれます。

（藤井律之）

◆史学研究会ホームページ・アドレス
http://www.shigakukenkyukai.jp/index.html

二〇一六年三月二五日印刷　定価一,二〇〇円
二〇一六年三月三一日発行
史林　第九九巻第二号（通算第五一六号）
京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科内
電話（〇七五）七五三―二七八七
FAX
発行人　史学研究会
振替京都〇一〇七〇―二―五一五五番
理事長　永井和
印刷所　京都市南区上鳥羽菓田二九
中村印刷株式会社